

フーリガン対策に関する一考察

A Way of Dealing with the Hooligan

1K03B179-5 氏名 水野正明

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 石井昌幸 先生

1 研究の動機、目的、方法

今年 2006 年、6 月から 7 月の 1 ヶ月に渡ってサッカー界最大のイベントである FIFA ワールドカップドイツ大会が開催された。

しかし、サッカーと社会の関係を論じる上でフーリガンの存在は欠かすことができない。私は卒業を控え、就職活動をするにあたって、警視庁の警察官を志望しており、サッカーイベントの警備に関心を持つようになった。サッカー界に特有のフーリガンの暴動の歴史を紐解き、フーリガンというものを明らかにしたい。

また今後、安全に安心してサッカーイベントを行うためにはフーリガン対策として、各国はどのような対応をするべきなのかを明らかにすることが本論文の目的である。

なお、本研究は、文献による研究とする。

2 各章の要約

第 1 章 フーリガンと暴動

第 1 節では、フーリガンの語源、定義、歴史、を取り上げた。フーリガンという言葉がいつ、どのように生まれたのか、ファンとサポーターとフーリガンの違いは何なのか、フーリガンはこれまでどのように発生してきたのかを見ていき、フーリガンというものを定義づけた。フーリガンには 3 つのタイプがあり、まず、暴力の行使と破壊を目的とし、酒を飲んでサッカー場やその周辺で暴れる真性フーリガン。2 番目は真性フーリガンの扇動にすぐ乗るタイプのフーリガン。3 番目は、群集心理によって最後に参加するフーリガンである。第 2 節ではフーリガンによる暴動の歴史について見ていった。ヘイゼルの悲劇はフーリガンの存在を広く世間に知らしめた事件として知られ、その後イギリス政府はフーリガン対策に本腰を入れざるを得なくなった。また、エリサルバドルとホンジュラスの間で起こったサッカー戦争はサッカーの試合が原因で戦争にまで発展してしまい、暴動の恐ろしさを改めて印象付けることとなった。

第 2 章 スポーツと暴動

サッカー以外のスポーツではこれまでにどのような暴動が起こってきたのかを見ていった。水原リンゴ事件は東京六大学野球の早慶戦で慶応の三塁手水原の行為に観客が怒りをあらわにし、試合後に暴動となった。北米で行われたアメリカンフットボールと野球の試合では応援して

いるチームが勝ったにもかかわらず暴動が起こってしまった。

第 3 章 各国のフーリガン対策

2002 年に日本で開催された FIFA ワールドカップ日韓大会におけるフーリガン対策を取り上げた。日韓大会では入管法の改正によって外国人 65 人の上陸を拒否し、暴動を起こさずに大会を終わらせることに成功した。フーリガンの本場であるイギリスではフーリガンに対する法律である「スポーツ競技場における安全にかかわる法律」「スポーツの試合（アルコールの統制など）にかかわる法律」などが導入された。また、ユーロ 2000 が開催されたときにベルギーとオランダはフーリガン対策として、当時、EU 加盟国間の国境での入管手続きが廃止されていたパスポートコントロールを復活させる特別法の制定などを行った。

第 4 章 まとめ

フーリガン対策として今後各国はどのような対策をするべきなのかを検証した。2002 年に FIFA ワールドカップ日韓大会が開催された際には、大会前にメディアによって予想されたフーリガンによる暴動が起こらなかったために、フーリガンによる暴動はメディアが作り出した物語に過ぎないと言われた。しかし、入管法の改正によって 65 人が日本への入国を拒否されている現実があり、彼らが皆暴れ、ファンやサポーターを扇動していたなら、大規模な暴動が起こっていた可能性は十分にある。一般市民の安全を考えると常に最悪の場合を想定してフーリガンの取り締まりを行うことは必要不可欠である。特に、初めから暴力の行使と破壊を目的とし、酒を飲んでサッカー場やその周辺で暴れる真性フーリガンに対してはこれまで以上に法律の整備によって警察や軍隊、入国管理官による取締りを強化することを提案する。また、ファンやサポーターがストレスによってフーリガン化することを防ぐためにも肉眼によるジャッジだけではなく、ビデオ判定の導入によるより正確なジャッジを行う事を提案した。ラグビーではすでにワールドカップで導入されていて、肉眼によるミスジャッジは格段に減少することとなった。また、ラグビーに見られるノーサイドの精神と試合後に行われているアフターマッチファンクションをサッカーにも導入することも提案した。